

江戸木目込人形

伝統の中に新しい息吹を吹き込んで独自の世界を模索する

「人形のまち」として知られる埼玉県岩槻市。足利時代より城下町、宿場町として栄えた岩槻は、日光東照宮造営の折、全国から職人が移り住み、周辺に人形作りが盛んになった。江戸木目込人形は、この岩槻を代表する人形の一つである。

木目込人形とは、人形の襟や帯、衣裳の襷の部分に細い筋を彫り、その溝に布を埋め込んで衣裳を着せた人形である。江戸中期、京の上賀茂神社で生まれたこの手法は、やがて江戸に伝わり岩槻でも用いられるようになる。仕立てられた衣裳を着付けるのではなく、人形本体に布地を木目込むため、一体一体に職人の技量や個性があらわれる。

新井久夫さん、39歳。江戸木目込人形の次代を担う若き伝統工芸士である。父の仕事場で遊ぶのが好きで、子どもながらに衣裳の配色を考えたりしていたという。教えられるわけでもなく父の仕事を手伝いながら、技を身に付けてきた。人形はまず粘土で原型を作って型をと

り、その型に桐の粉と正麩糊を合わせた桐塑を詰めて胴や頭を作るが、構想を練り上げるまでが大変だという。どんな人形を作るか、フォルムや衣裳の配色など、あれこれ頭を悩ませる。裕の色合わせや袖口にほんの少しのぞく色の妙で、人形の雰囲気が変わってくるのだ。色合わせを考え出すと、夢の中にまでさまざまな布地が浮かぶほどだという。そうして決まった絹布を目打ちで木目込み、縫い合わせや重ねの質感を巧みに表現していく。

「職人自身が布地を選び木目込んでいきますから、布の持ち味を活かして人形にさせてやりたい。人形だけでなく飾られる空間やその状況も考えなければならぬ。その上で自分らしさも出したいですね」。伝統ある日本人形の世界では決まらなくても多く個性を發揮するのはなかなか難しいが、衣裳の模様を浮き立たせ箔押しをしたり、細やかな重ねの技法で裕を木目込んだりと意欲的に挑戦を続ける。新井さんが目指すのは、あたたかみを漂わせ、穏やかに存在するだけに見る人々の微笑みを誘うような人形だという。

人形は胴体や頭をはじめ、手や髪、扇や箱などの小道具など専門の職人によって作られる。これらの専門職が集まっているからこそ、岩槻は人形のまちとして成り立っていると新井さん。「何一つ欠けても人形はできません。お互いの仕事を認め合い、助け合ってきたからこそ、人形の町としての伝統が受け継がれてきたんじゃないでしょうか。これからも職人同士のネットワークを大切にしていきたい」。多くの人々の手が丹念に作り上げたものだからこそ、人形はあんなに愛らしいものなのかもしれない。

人形は日常使われる他の工芸品とは少し違う。「雛祭りや端午の節句などを祝う習慣がなくなれば消えてしまう人形もある。生活様式も変わり、人形を飾る「ゆとり」が失われつつある中で、文化を担っているんだという自覚を持ち、伝統を守りながらも時代にマッチした人形を作っていかなければと思っています」。新井さんは、木目込人形に初めて入眼目を取り入れた。「木目込人形は描き目が常識で、入れ目はありえないことだっ

た。でも、それも私にとっては冒険ではなく、もっといろいろな表情を求めた結果の、ごく当たり前のことだったんです」とサラリと言う。人のまねのできない人形をと、独自の世界を追求する新井さん。人形のまち、岩槻から個性的な木目込人形が生まれる日が楽しみである。

取材協力：伝統的工芸品産業振興協会
岩槻人形協同組合



